

下北半島・岩手三陸沿岸地域における 風名語彙の分布

—『風の事典』を資料として—

志村文隆

はじめに

1. 問題の所在と本稿の目的
2. 『事典』 収載語彙の性格
 - 2.1 調査時期と調査形式による基礎資料の相違
 - 2.2 資料の位相性
 - 2.3 見出し語表記の特徴
3. 下北半島・岩手三陸沿岸地域における風名語彙の分布
 - 3.1 調査対象とする語彙収載地点と地点記載風向
 - 3.2 語彙の分布特徴
 - 3.3 下北半島・岩手三陸沿岸地域における風名語彙の分布パターン
 - 3.4 指示風向から見る風名語彙体系

おわりに

はじめに

全国規模の調査資料にもとづき、関口武によって著された『風の事典』の語彙資料を利用して、風の名前を表す語彙（以下、風名語彙）の分布特徴と語彙の部分体系の特徴を考察する。対象とする地域は、青森県下北半島から岩手県の三陸地方である。本書から得られる情報にもとづいて作成した語彙分布図を提示して、個々の語の分布特徴を明らかにする。そして、本地域の風名語彙には、いくつかの分布パターンが見られることを示すとともに、地域ごとに見られる風名語彙の部分体系の特徴について述べる。

1. 問題の所在と本稿の目的

日本で最も多くの風の語彙を収載する『風の事典』（以下、『事典』）の中には、著者の関口武による「全国の風名調査」の結果が収められている。この部分には大規模な全国調査のデータによる方言語彙集としての性格がある。収載語数や地点密度の高さにおいて類書がなく、語の意味となる風

向のほかにも、吹く季節や寒暖などを記した項目も多い。これまで筆者は、本書の資料性の高さに着目して、一定の地域を対象に、記された語形と調査地点を利用して言語地図を作成し、そこから語彙の分布を明らかにし、あわせて語彙の部分体系の特徴を考察してきた（志村 2014a、2014b）。

この結果、五十音順に並ぶ語彙の一覧の形式からうかがい知ることのできなかった分布特徴が明らかになってきた。もっとも、関口による都道府県別の集計表を加えた本書「第一部」の内容からは、語彙の分布図は全く示されていないものの、沖縄を除く全国での主要な語彙の存在自体を著者自身による概説とともに捉えることはできた。しかし、そこに示されているのはあくまで都道府県単位でくられた出現度数表であり、本書を特徴づける、市町村や字レベルでの地点密度の高い語彙情報は、語彙集本文を語項目ごとに一つ一つ確認してゆくしか方法がなかった。

また、これまでに指摘したように、『事典』としての性格上、見出し語ごとの意味記述がなされるほか、本書前半部分でも語単独で解説を進める記述のスタイルがとられていることから、語彙を体系的に扱う視点が全く見られないことが悔やまれる。複数の風名語彙が特定の地域でどのような構造を成して用いられているのか、語を単独で記述するだけでなく、できるだけ語彙体系に注目することで語彙の相互関係が見えてくるはずである。

そこで、本稿では、筆者がこれまでに臨地調査も試みている¹⁾、青森県および岩手県の太平洋沿岸部を中心としたエリアを設定し、その範囲内から本書データを収集して地図化を行った。これによって、当該地域沿岸部に、どのような風名語彙の分布特徴が見られるのかを明らかにする。また、地点内の語のデータを総合する方法によって部分的な語彙体系を示し、その結果見えてくる特徴を考察してゆくことにする。

2. 『事典』収載語彙の性格

2.1 調査時期と調査形式による基礎資料の相違

資料とする『事典』に収められた風名を語彙資料として用いるためには、留意しなければならない様々な性格を確認しておく必要があり、その概要はすでに志村（2014a、2014b）で述べた。ただし、これまでに指摘した部分に一部曖昧な部分を残していたことから、本稿で内容を改めて再度整理をし、今回の対象地域に見られる地点記述上の個別の留意点ともあわせて資料の性格を確認しておくことにしたい。

『事典』「第二部」は全国規模の範囲で収集された風名語彙集である。著者によれば2036語の風名が収められているとされる²⁾。「第一部」の「はじめに」の記述において、この「第二部」所収語彙の出所は、資料自体の性格や調査時期と方法に異なりのある3種の資料から構成されていることが示されており³⁾、以下のようにまとめられる。

- (1) 著者が1980年に全国2322か所の漁業協同組合の地区漁協へ依頼したアンケート調査のうち、回答のあった1301か所にわたる「全国の風名調査」のデータ。
- (2) 著者による「実地調査による資料」。本文に「わたくしが機会ある毎に行ってきた実地調査による資料」とあるのみで、調査時期は不明。

(3) 1935年に刊行された、柳田国男編『風位考資料』。

(1) はアンケート形式の調査であり、(2) は被調査者への聞き取りの可能性が高い臨地調査、そして(3) は文献資料からの引用であり、それぞれ性格を異にする基礎資料群である。

『事典』本文では、見出し語に続き、主として特定の風向が意味として記され、続いてその語の報告地点が地名で示される。地点表記の地名が「岩手県下閉伊郡岩泉町小本」のように、大字レベルまで示されている語項目は、ほぼ(1)の調査結果と見られ、この地点は、アンケート調査先となった漁協所在地か、あるいは調査票記入者による語の使用地域名と考えられる。一方、地点名が「青森県下北郡」「岩手県閉伊海岸」などの広域名で示される場合がある。この広域名表示となるほとんどの見出し語上部には、「第二部」の凡例によって「現在はもはや使われていない」とする○印の記号が付されている。したがって、これは(2)および(3)から引用した語と判断される。ただし、(1)のデータに○印記号が付された項目も多い。これは、調査時の被調査者の回答自体である可能性もあるが、(2)であることも考えられる。また、見出し語上部に▽記号が付されている語項目がある。凡例では「▽印は現在なお使われていることを示すもの」、また「無印は、今回の調査により、その風名の使用が報告された地点を示すもの」とある⁴⁾。「今回の調査」の表現から、(1)の結果から得られた当時の使用語は、少なくとも無印部分であると判断できる。しかし、▽印の「現在なお使われている」とする見出し語が(2)単独の結果を示すものなのか、あるいは(1)も含むのかの判別が難しい。凡例冒頭にある「昭和五十五年(一九八〇年)現在で集められた日本各地の風の地方名」が示す「現在」としても、(1)の調査年と同年となるからである。

このように、(2)の資料に該当する語はどれなのか、(1)と(2)とが重複した語項目はあるのか、などの点において、最終的に判断のつかない部分が残る。

2.2 資料の位相性

『事典』「第二部」の収載語の大半を占めるのは、1980年までに主として漁業関係者が漁業地区で使用していた風名語彙である。したがって、この資料から得られる風名語彙には、特に漁業従事者が用いる語彙という位相性が存在している。

見出し語となっている風名語彙には、操業のために必要な職業語として、もっぱら漁業従事者の間で用いられてきた呼び名も含まれているはずであり、また、語が意味する風向のバリエーションには、今後の風向変化を確認するための、様々な意味を引き出す操業上のインデックスとして機能している面もある(志村 2008a 等)。つまり、地点ごとに集約できる語彙とその意味となる多様な風向事象には、漁労と密接に関連する複合的な意味が内部に潜んでいることが考えられる。このような位相性は、見出し語に付帯した括弧内の記事部分からも一定程度は具体的に把握できる。記載される内容や分量に地点間でばらつきが少なくないが、語によっては、季節、天候、強弱、吹く時間・期間の長短、温度、海の状態、危険性、豊漁か不漁か、身体への影響などの記述が適宜加えられている。

このほか、漁業語彙としての性格以外にも、収載語には被調査者の出身地や年層、外住歴などの属性差も反映しているかもしれない。このように、資料となる語彙には、漁業社会に関わる位相性

が存在していることに留意が必要となる。

2.3 見出し語表記の特徴

アンケート形式での調査結果部分と判断される見出し語を見ると、ナライとナレイのように、同語でありながらも様々な語形表記が混在している。こうした例は、異なる地点間のみならず、同じ地点内データにも併存している場合がある。このことから、各語は調査回答時に記載された被調査者による表記結果を用いて、そのまま見出し語表記に反映させる形で収録されたと見られ、著者による語形表記の統合等を行われなかったと判断される。今回考察対象とする地域内に現れる見出し語表記の変異は、ほとんどが方言の音声的特徴を反映したものである。以下に、観察される表記特徴の種類を整理しておく。

(a) 母音のイとエ

「浜沿い」の表記にハマゾイとハマゾエが見られ、狭いエ [e₁]の記載にあたっての表記の揺れがうかがわれる。語末の拍の例に限られ、たとえばイナサがエナサと表記されるような語頭での例は見られない。

(b) 連母音の融合

アイ連母音では、ナライと、その融合形ナレイ・ナレエの両語形がある。アオ連母音では、「真沖」と見られるマオキと、その融合形モーキとがある。

(c) カ行・タ行子音の有声化

カ行子音が含まれたキタムキ（北向き）では有声化したキタムギが見え、タ行子音では、コチの例でコヂ・コヅ、マカタ（真方）にはマカダのほか、カ行とタ行両方にわたるマガダがある。

(d) 一つ仮名

シモカゼ（下風）には、シモカゼ・スモカゼ、また、スモヨーがある。そのほか、コチ・コツの例などがある。これら以外の「シ」・「ス」や「チ」・「ツ」のそれぞれの表記は、特に地域的な偏りが見られずに各地点に散在している。

(e) 口蓋化と摩擦音化

ヒカタ（日方）には、ヒカタのほかシカダがあり、口蓋化に伴う摩擦音化を示す例である。

(f) 上記方言音声の例とは別に、長音表記に仮名遣いの違いが混在している。例として、モウコカゼ（蒙古風）とスモヨー（スモは「下」、ヨーは「様」か）があげられる。

3. 下北半島・岩手三陸沿岸地域における風名語彙の分布

3.1 調査対象とする語彙収載地点と地点記載風向

図1は、今回考察の対象とする全地点の地点位置と地名を示し、さらに『事典』に記載された各語の風向表記を整理して得られた、地点ごとの弁別数を示したものである。たとえば、下北半島の「蛇浦12」は、図10に示すように、各語で構成される12風向の弁別が数えられるということを示す。

本稿では、志村（2014a、2014b）と同様に、各地の方言語彙の分布図作成と語相互の比較、および語彙の部分体系を扱う目的から、調査対象とする『事典』収載語の調査・記録時期は一定の期間の事例に限定することにした。したがって、1980年実施の著者自身によるアンケート調査の結果部分のみを資料として使用し、『事典』収載語のうち、前述した（3）柳田国男編『風位考資料』による引用部分は使用しない。また、著者による「実地調査による資料」とされる部分および他の文献から引用する形式で収載された語は、調査方法が異なる上に、調査時期が不明なため、アンケート調査データと同様に扱うことは好ましくないと判断される。しかし、すでに述べたように、最終的に（1）の漁協アンケートと（2）の筆者自身の調査との区別に曖昧さが残るため、前述した「現在なお使われている」とする、見出し語上部に▽記号が付されている語も分析対象に含めることとした⁵⁾。

上記のように、語が地点名とともに立項されていたとしても、1980年実施のアンケート調査結果と見られる資料以外から得られた語例は、本稿で扱うデータからは除外されることになる。この結果、図1に見えるように、『事典』内に語項目や地点名、また風向記述等が掲載されていても、記載風向数がゼロとなるケースが現れる（田野畑村田野畑、宮古市宇部町、大船渡市盛）。

以上の設定によって、資料として使用する地点は70地点となった⁶⁾。以降に全地点名を『事典』の地名表記のまま記載する。なお、本書の地点表記には、「脇野沢村」と「脇野沢村本村」のように、同一地域内に、広域名と大字単位とが混在して語が立項されている場合がある。また、本稿で用いる市町村、字等の地名は全て『事典』記載当時に従う。

青森県内25地点は以下の通りである。むつ市大湊新町、同・関根浜、川内町川内、脇野沢村、同・本村、佐井町佐井、大間町奥戸、同・大間、風間浦村蛇浦、同・易国間、同・下風呂、大畑町大畑、東通村石持、同・岩屋、同・尻労、同・小田野沢、横浜町下川原、六ヶ所村・泊、同・平沼、同・尾鮫、平内町浅所、十和田市藤阪、野辺地町野辺地、八戸市、階上町道仏。

岩手県内45地点は以下の通りである。種市町宿戸、同・戸類家、同・有家浜、同・玉川浜、同・陸中八木、久慈市、同・長内町、同・侍浜町、同・宇部町、野田村、普代村、岩泉町小本、田野畑村、同・田野畑、同・浜、田老町、宮古市宮古、同・津軽石、同・磯鷄、同・欽崎、同・ひたち浜、同・光岸地、同・港町、山田町、同・大沢、同・織笠、同・船越、大槌町安渡、釜石市釜石地方、同・箱崎町、同・浜町、同・鶴住居、同・嬉石、同・平田、同・唐丹町、同・唐丹町小白浜、三陸町吉浜、同・越喜来、同・綾里、大船渡市大船渡町、同・赤崎、同・末崎、同・盛、陸前高田市小友町、同・気仙町湊。

図1から各地点の指示風向数を見ると、下北半島北部や東部、宮古市周辺、釜石市の北部などの数値がやや高いように見える。ただし、これらの地点に隣接する、脇野沢・八戸周辺・田野畑などの地点では、逆に極端に風向数が少ない地点も少なくない。風向数に地域性が反映することは既に先行研究で明らかになっているが⁷⁾、このようなやや大きな差異が生じている原因を地域性に求めるのは慎重にならざるを得ない。本資料の場合、アンケート調査に伴う回答の質、たとえばアンケートに回答した地点ごとの人数の多寡から生じる語彙量の差や回答対応への個人差、調査受け入れ漁協での回答処理方法の違い、あるいは漁業形態や操業規模の違いなどの位相面による差など、

調査に伴う情報量の差から生じた偏りも大きいと考えられる。このように、『事典』収載語彙に見られる、地点ごとの語彙量と風向数の偏在の解釈には、各地域で実際に使われた全ての風名語彙が記載されていない可能性を含んでおくことが必要である。このことから、本書データに現れた各地の風向弁別数から何らかの分布特徴を把握することは容易ではなく、以降に示す語彙分布からの分析が肝要となる。

3.2 語彙の分布特徴

3.2.1 地図化の方法

風名語彙の意味の一つである風向に着目して、基本8方位のいずれかを意味に持つ全ての語彙について、それぞれを記号化し分布図を作成した。図2から図9として示す。

本稿での語の表記は、原則として『事典』表記のままで用いた。ただし、2.3に示したような、音声レベルでの表記の変異に関しては、たとえば、コチ・コヂ・コヅを「コチ類」のように統合して扱う。したがって語の記号化にあたっては、これらは原則として同一の記号で表現した。

地図上での記号の表示は、『事典』の地点名を手掛かりに当該地点上に対応するように配置したが、地点が混み合った地域では、記号が重なり合わないよう実際の位置から若干移動させている場合がある。特に、『事典』内で複数の語が併存する地点では、記号列が該当する地点から横に広がるように表示している。併記された複数の語については、それらの語の記号の上部を括弧で括って示した。また、『事典』の地点には、「脇野沢村」や「山田町」のように広域地名で表示された場所がある。この場合、記号の表示位置は、その地域の主要な港湾の近くに置くようにしたが、大字単位の地点が近くにある場合には、記号が重ならないようにその左側に表示してある。

以下の項目では、それぞれの分布図を示しながら、必要に応じて他の風向の語彙分布も参照し、あわせて『事典』データに記載された風の性質も適宜引用しながら、分布の特徴を考察する。

3.2.2 北風の分布

図2では、下北半島のアイノカゼ類とタマカゼ、岩手三陸沿岸に点在するコチ類が比較的まとまって分布しており、『事典』調査地点でありながらも北風には収載語のなかった三八地方がそれらの分布の境界地域となっている。

本地図の範囲外ではあるが、アイノカゼは、下北半島のほか津軽半島の一部や北海道道南地方など、津軽海峡域にまとまって分布が見られる語である(志村 2014b)。ただし、次項で述べるように、この語は北東風で用いられている地点も多い。久慈市長内町にあるアイタバは、アイとタバ(カゼ)との複合形で、今回対象とした地域ではアイ類の南限となっている。アイノカゼ類は、本書のデータによると、北海道から福岡県にわたる広範囲に使用事例が見える。特に収載地域が際立っているのが北風と北東風であり、北海道と青森、北東風では鳥取・島根に多くなっている。なお、『日本方言大辞典』では北陸での用例も多い⁸⁾。『日本国語大辞典(第二版)』によれば、アイノカゼは古代から用例の見える語であり、東風での「越地方」のほか、中世には越前で北西風の例がある⁹⁾。また、近世の日本海航路上りの船が利用した風として『事典』で紹介されている¹⁰⁾。



このような日本海側にその起源と主要な分布を持つアイノカゼが、津軽海峡から太平洋側に伝播した形跡が、『事典』データからは確認できる。なお、風の性質が記載された本地域内の地点では、冬の危険な強風で、不漁とするところが多い。

コチは、中古より用例の見える東風を表す語であり、『日本方言大辞典』からも、東風を中心として東北から沖縄まで広い分布が確認できる¹¹。本地域内では、後述するように、北東と東にも現れ、分布の中心は東風である。キタカゼとの併記地点が多い要因としては、調査当時、すでに被調査者個人単位でコチの使用が少なくなっていたこと、あるいは、同一地点の複数にわたる被調査者の中で共通語化が進行していたことにあるものと思われる。

タマカゼは、青森側に分布しているが、後述する北東風や北西風での例も多い北系統の語である。北風を表す語は、隣接する北西風や北東風に比べて、岩手側を中心に共通語形キタカゼが多いことも特徴である。

3.2.3 北東風の分布

図3を見ると、北風を示すアイノカゼが下北半島西部で目立っていたのに対し、津軽海峡沿岸部では、北東風のアイノカゼが集中して分布している。

前項にも示した久慈市長内町のアイ類のうち、北東風を示すアイは、アイ類の南限となっている。『事典』「第一部」の解説記事のうち「アイ・アユノカゼ」の中には、「津軽海峡を東へぬけた下北・南部地方では岩手県久慈港まで、アイは北東をさす風の名前として知られている」とあり、この地点データについて言及したものと思われる¹²。

陸奥湾周辺ではシモヤマセが北東風を分担し、ヤマセは次項で述べる東風が多い。このシモヤマセは、他の風向でも岩手側には見えない語であり、キタヤマセ（北東風）やマヤマセ（東風）、ミナミヤマセ（南東風）と合わせ、本地域内のヤマセの複合語は、青森側のみ認められる。

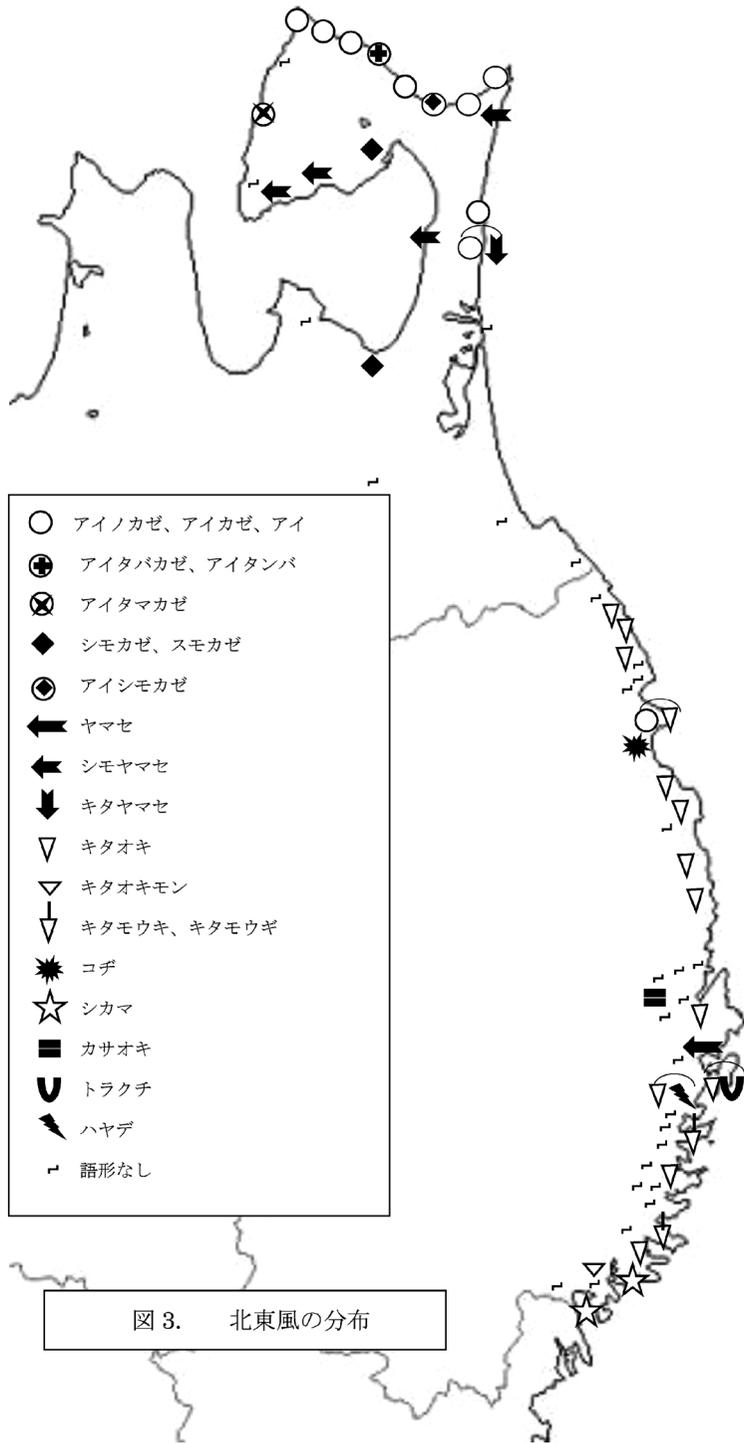
岩手側にまとまった分布があるのはキタオキ類で、青森側には全く認められない。次項の東風に示すオキカゼの複合語である。シカマは、三陸南部に分布が見られる。使用の中心は岩手三陸で、見出し語の付帯説明では北側の風向を中心とする冬の代表的な冷たい強風とする地点が多い。このほか、北風向では共通語形キタカゼが多く分布するのに対して、北東風では、ホクトー（ホクトウ）・ホクトーフー（ホクトウフウ）のような漢語の共通語形が現れないことにも特徴がある。

また、北東風で特に顕著なのは、収載語形のない地点の多さである。岩手側の宮古周辺のほか特に南部の釜石地区から三陸町周辺に多く、キタオキの報告地点と重なっている。語彙体系の穴に該当する可能性もある。

3.2.4 東風の分布

北東風の場合と同様に、岩手三陸側にまとまった分布を見せるのがオキカゼ類とコチ類で、三八地方を境界に、青森側のヤマセと大きく対立しているのが図4から確認できる。

ヤマセは青森側で単独のまとまりを見せ、語のバリエーションが少ない。マヤマセのある、むつ市大湊新町と六ヶ所村平沼の二地点では、南東風ではともにミナミヤマセ、また平沼の北東風では



キタヤマセが示されていることから、この地域では、ヤマセ類を用いた風向の使い分けが特徴的でもある。「マ(真)」を用いて、ヤマセが示す風向の中心となる東を指示している。

岩手側にまとまるのがオキカゼ類、コチ類である。地図上で三角系統の記号を与えたオキカゼ類には、オキカゼのほかに、オキ・オキヨー・オキモン・オキアゲ・オキイキ・マオキ・オキアラシが認められる。田老では、オキカゼ・オキヨー・オキアゲを含む4語形の併用が見られるが、この地点は他の風向でも特に併記された語が多い。同じ風向を持つそれぞれの語に意味の違いの説明がほとんどないことから、個人単位の併用というよりは、複数の被調査者の回答が併記されている可能性も考えられる。田老でのオキカゼとオキアゲには、風向以外の意味記述は見られないが、オキヨーには、「冬～春さきの風で、急にきて波が高くなる。小さい舟は逃げてくる。寒い」とする性質の説明が付される。有家浜と安渡に見えるマオキは、マヤマセと同様に東風向を示し、有家浜の北東風キタオキ、安渡の南東風ミナミオキとの区別を示した語形である。

北風の項でも触れたように、コチ類が最も多くの地点で確認できたのが東風であり、意味とともに方言に古語が残存している例である。北風の場合と比較すれば、共通語形ヒガシとの併用地点が岩手三陸の南部で少ないことがわかる。

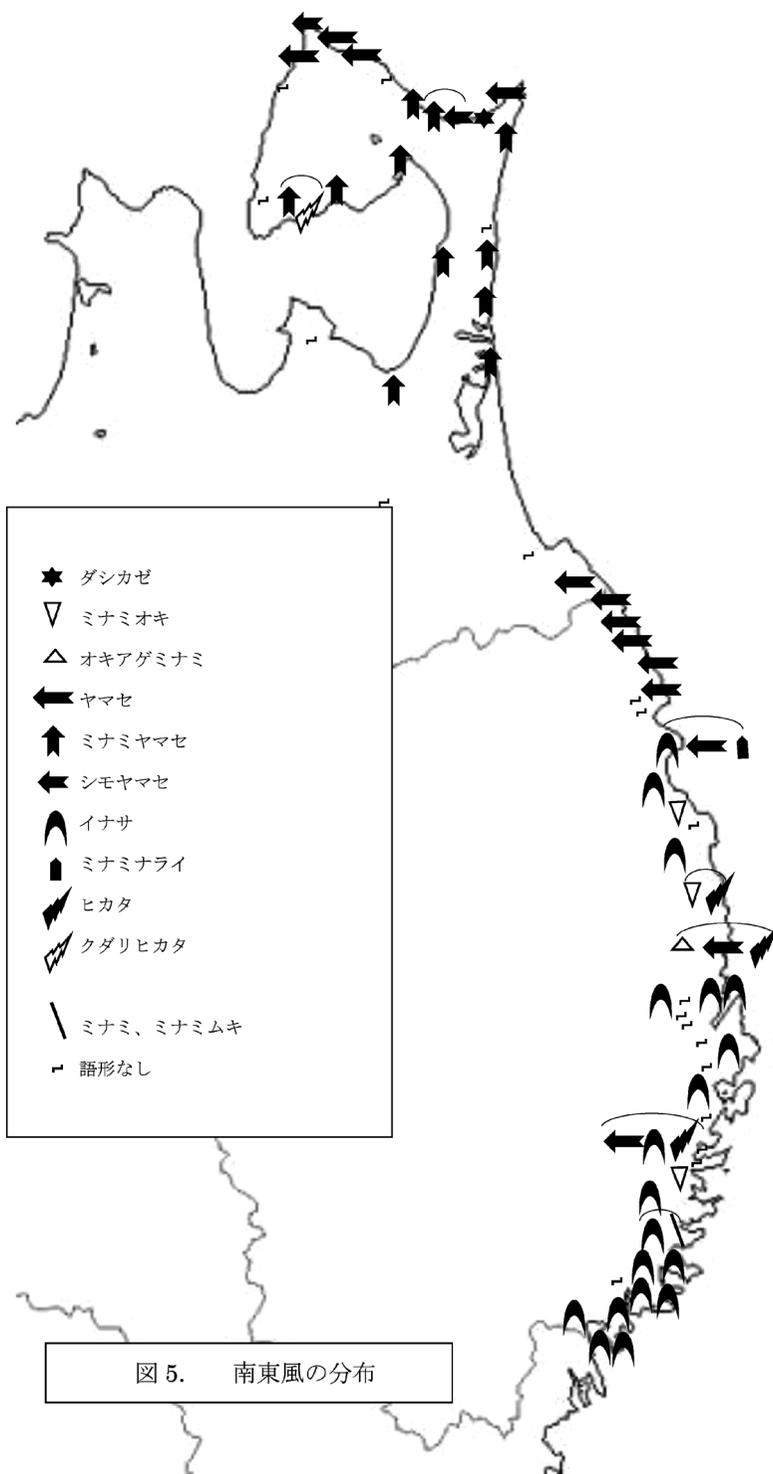
3.2.5 南東風の分布

図5を見ると、下北半島から岩手側北部を中心に南部までヤマセ類が分布する一方、岩手側では久慈市長内町地点から南にかけてイナサがまとまって分布するという大きな対立がある。また、南東風の共通語に該当する語はほとんど確認できない。

ヤマセ類は、これまでに見たように、東風を中心に、例は少ないが北東風、また北西風の1例が確認できる。南東風の場合、ヤマセは、青森側では下北半島の津軽海峡沿いに分布し、半島南部のミナミヤマセを挟むように岩手側にも散在する。このうち、階上町から種市・久慈方面には特にヤマセが集中しており、以南では他の語との併記地点が多い。南東風のミナミヤマセは、『事典』を確認すると津軽半島や秋田、北海道でも報告地点が多くなっている。このような分布形態から、かつて広くヤマセで覆われていた地域の中で、新たにヤマセの特定方位へ個別呼称としてのミナミヤマセが発生して周囲に伝播し、その結果、ヤマセの分布領域を分断した過程が考えられるかもしれない。

ヤマセ類とともに注目されるのが、イナサである。イナサは『日本方言大辞典』によれば、近世に江戸での用例が見え、東日本を中心に中国・四国地方まで、南東風の意味での用例も認められる。関東から伝播したイナサが、本図によって久慈市の長内町地点まで北上したことが確認できる¹³⁾。このイナサの伝播に伴い、岩手三陸南部では、それまで使用されていたヤマセ類と交替が起こったことも考えられる。長内や田老に見られる、イナサとヤマセとの併記は、それを裏付けるように思われる。このほか、岩手側に点々と分布するオキカゼ類のミナミオキとオキアゲミナミは、既述したように東風が用例の中心である。たとえば岩泉町小本地点に見られた形である、東のオキカゼに対する、北東のキタオキ、南東のミナミオキとが作る構造が見える。

岩手側中南部には、ヒカタが3地点に分布し、すべて併記地点となっている。南西風での青森でのヒカタ部分で後述するが、岩手の田老では「強い風」、小本では「秋の台風時に荒れる風」との



付帯説明が示されているように、この風名が強風を表して他語との意味上の区別が行われているものと見られる。

3.2.6 南風の分布

図6に示したように、他の風向に比べて共通語形が特に多く、ミナミカゼ類が広く分布する。このため方言量も比較的少なくなっている。また、併記地点が少なく、各地点で共通語形単一の分布になっているケースが多い。

そのなかにあって、狭い範囲で多少のまとまりを見せているのが下北半島のクダリ類である。この語は、隣接する津軽半島や北海道の各地のほか、新潟、富山、石川などの日本海側でも南風向系統の風名として本書に立項している。『日本方言大辞典』でも、北陸や東北が用例の中心であり、南や南西風などの南系統の風向が多い¹⁴⁾。クダリは、本図では下北半島西部にのみ見られる語であるが、後述する南西風では、青森県のやや東寄りの地点にまで分布している。

下北半島の尻労1地点にはカミカゼがある。対になる語に北風向系統のシモカゼがあるが、本地点尻労ではシモカゼ類の立項はない。

ヒカタ類は次項の南西風での例が多くなる。大畑では南風がシカタ、南西風でヒガタが見え、シカタでは「比較のおだやかな暖かい風、漁に最良」、ヒガタには「春さきに多い風で時々突風を伴い危険」とある。ともにヒカタの音声上の変異形と思われ、同一個人の使用分けかどうかは不明であるが、図上ではヒカタ類で一括している。立項数の少ない十和田藤阪でのヒカタには、「五月ごろの暖かいミナミノカゼ」の説明がある。これらの例から、本地域内の南風のヒカタでは、必ずしも強風の意味を含まない例が含まれていることが分かる。

このほか、北西風に多いマカダが種市町宿戸の1地点に見られる。後述するように、『事典』の北西風マカダの北限は久慈市長内町であるが、宿戸の南風向マカダがそれよりさらに北部地域に位置していることになる。

3.2.7 南西風の分布

図7に見えるように、方言量はやや少ない。同様に方言量が少ない傾向にあった項目は、北風と南風であるが、これらは共通語形の分布が多いことが特徴である。一方、南西風では限られた方言形がまとまりを持って分布していることと、岩手側南端付近多くの地点で語形が立項されていないことによるものである。南西風ではいくつかの語の対立が確認できる。

下北半島から岩手側の久慈市付近までまとまりが見えるのがヒカタ類である。これまで見たように、三八地方を境界に南北で異なる語の分布が存在するケースがあったが、ヒカタ類の分布領域は、三八地方を越えて岩手側に侵入する形となっている。南東風のヤマセの分布領域にやや近似しているが、ヤマセでは、本地域内での使用の南端が併記の形で岩手三陸南部にまで及んでいるという違いがある。この南西風のヒカタ類は、『事典』では台風などの秋の危険な強風を指す地点がほとんどで、災害をもたらす風とする付帯説明も多い。津軽海峡域での筆者の臨地調査でも、漁業従事者の最も恐れる風としての説明がある(志村 2008b)。岩手側の種市町周辺の地点でも「強い風」

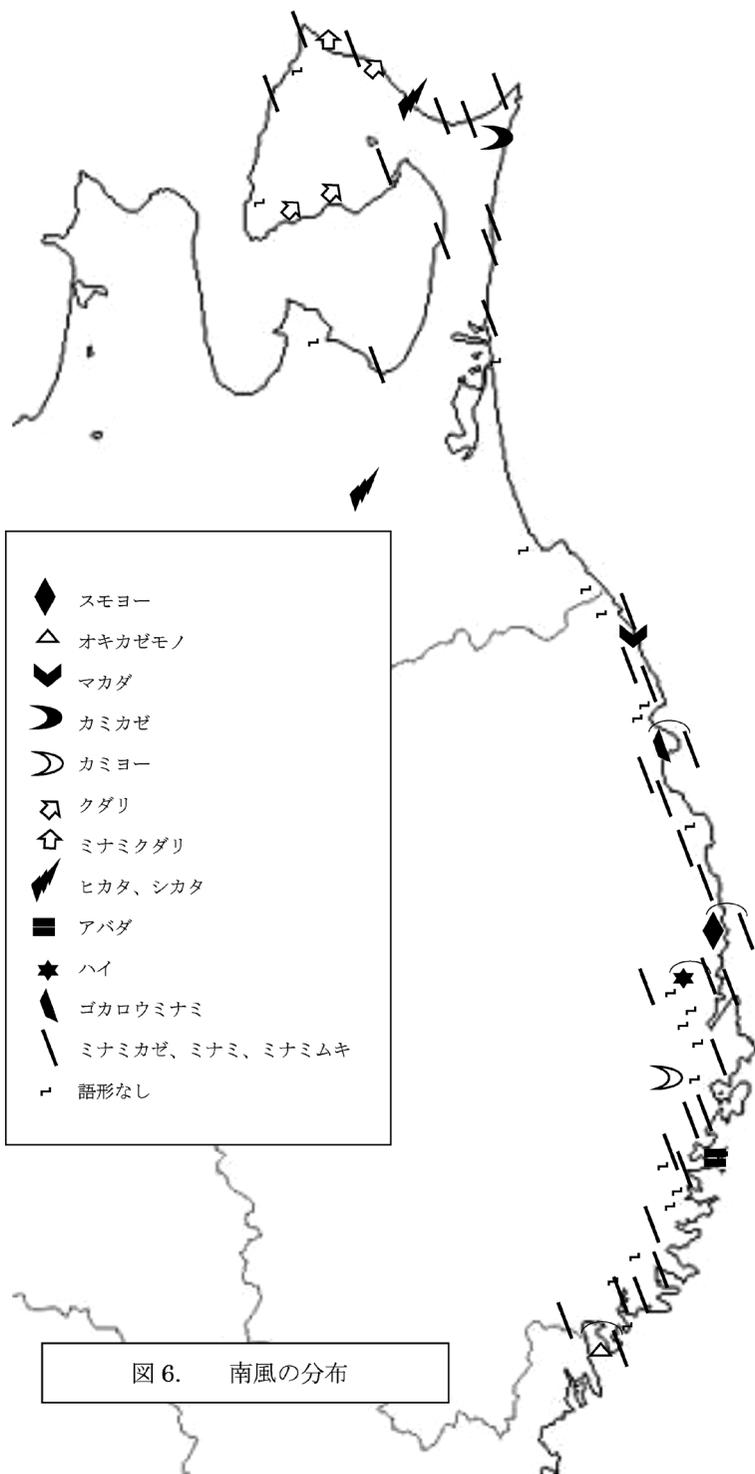


図 6. 南風の分布



の付帯説明が見られるが、この地域内の宿戸では「なぎの日に多い風」とする記述も混じる。

一方、岩手側に比較的まとまるのが、ナライ類とハマゾイ類である。

ナライ類は、久慈市長内町のニシナライを最北として、南に山田町船越付近まで出現している。ただし、船越以南では語形の収載自体がかなり少ない。この空白地域では、ナライは後述する西風と西北風を分担しており、冬の強い季節風とする意味を示す地域が多い。ヒカタ類南限の久慈市長内町では、岩手側南部から分布するナライ系の語のうちのニシナライと、下北半島から分布するヒカタ類とが併記の形で接触していることが注目できる。

一方、ナライの分布地域に入り込むように、岩泉町小本から南にハマゾイ類が点在している。他の地点は、小本、鉾崎、宮古、箱崎であり、それぞれの地点や操業海域の地形に沿った「浜沿い」となる南東方向の風の特徴に名称を与えた可能性がある。意味は強風とする地点がほとんどである。

また、南風では下北半島西側に見られたクダリ類が、南西風では、わずかながら青森側でやや東寄りの地点に広がり、岩屋や野辺地にまで分布している。

3.2.8 西風の分布

図8に西風の分布を示した。ほぼ全域に共通語形ニシカゼ類が分布している。特に下北半島から岩手北部に多い。その中でも、いくつかの方言形のまとまりが見られる。

下北半島西部と岩手野田村にカミカゼがある。南風では尻労1地点に見られた語である。

三陸の田野畑から宮古にかけてと下北半島泊に分布するのがアラシである。この語について『事典』「第一部」の解説記事には、「東日本太平洋沿岸地帯には、静岡県西部の特例を除くと、全く知られていない名称である」とある¹⁵⁾が、この地域内の三陸中部域にはまとまった分布が確認できる。以下のアラシについての『事典』各見出し語に付帯する説明に見られるように、一般に共通語で用いられるような激しい風を意味に含む地点は存在していない。「夏～初秋の夜吹くニシのそよ風(陸風)」(泊)、「夕暮れから早朝まで、陸から吹く弱い風」(田野畑村浜)、マアラシでは「なぎが多い」(宮古)とある¹⁶⁾。アラシは全ての地点で、共通語系統のニシカゼ類・マニシ・マカゼのそれぞれとの併記である。このうち、泊でのニシカゼの説明には、「四季を通じて吹き、好天が続く安定した風」等とあり、意味の異なりによるアラシとニシカゼ双方の使い分けの存在がうかがえる。

ナライ類は宮古地域以南にまとまりを見せている。南西風と北西風それぞれのナライが使用される地域と隣接しており、西風向系統の語として一定の分布領域がある。

3.2.9 北西風の分布

北西風では、図9に見えるように方言量が多く、比較的狭い地域で語ごとのまとまりのある分布が見られるのが特徴の一つである。

下北半島では、ほぼ全域でタマカゼ類の分布がある。青森県では八戸まで分布が認められるが、岩手県内への進入は見られない。ただし、ともに2拍目に両唇音を持つことから、語源的な関係がうかがわれるタバカゼが下北半島内に散在するとともに、久慈市長内町への分布も認められる。既に見たように、タマカゼは下北半島ではキタカゼで使用される地点もある。タマカゼは、北風の

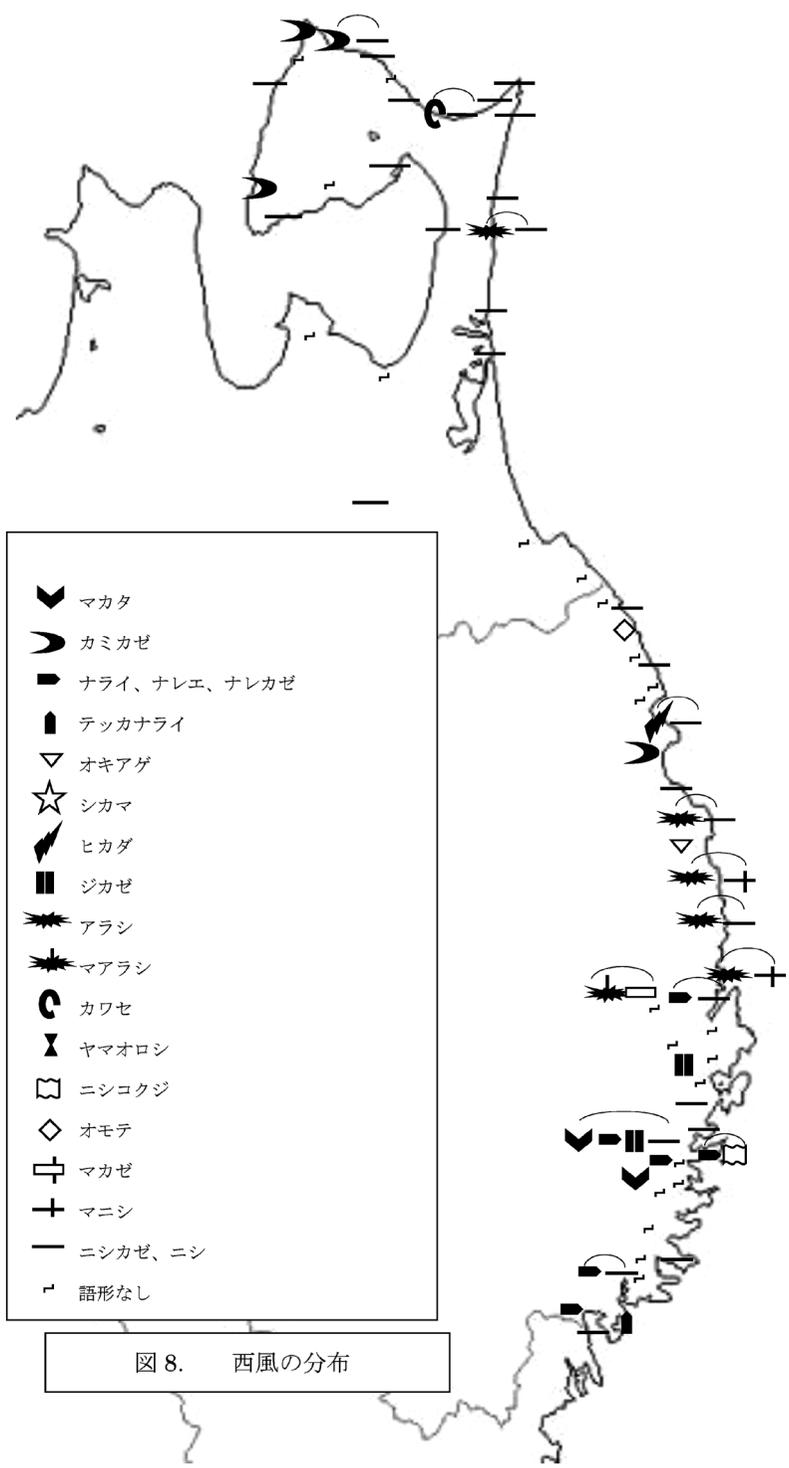
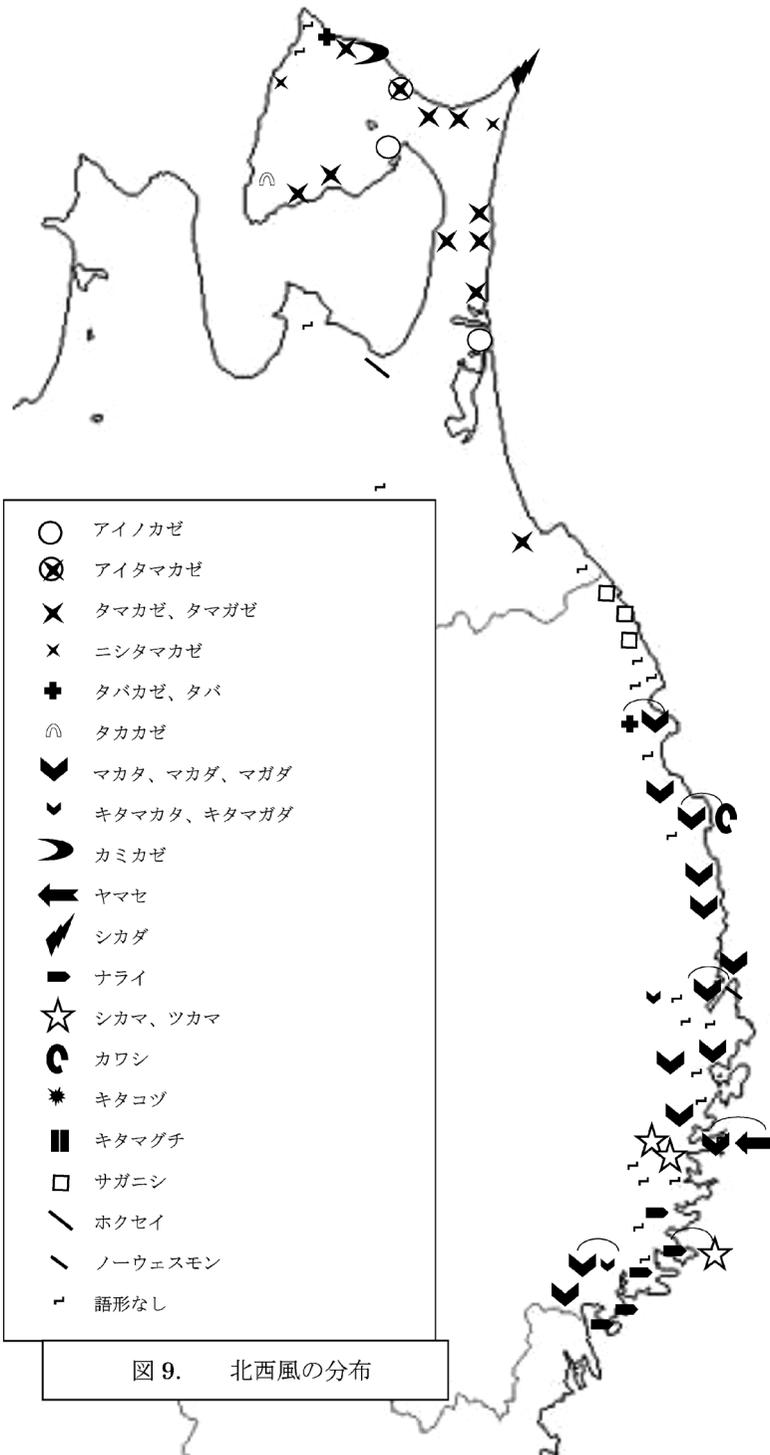


図 8. 西風の分布



項で触れた通り、主に冬に吹く寒い強風で、出漁不能とする地点が多い。

岩手県種市町の玉川浜・戸類家・宿戸の連続する3地点には、サガニシがまとまる。『事典』では関東などのほか、東北では宮城に立項がある。また、複合語で北海道での事例も認められるものの、本地域内では孤立的な分布形態となっている。

岩手で広い分布領域を持っているのはマカタ類である。西風や南西風でも県南部に若干の分布が認められたが、北西風での使用がほとんどである。

釜石周辺のシカマには強風の説明とともに、浜と唐丹の2地点に「危険度大」とする付帯説明がある¹⁷⁾。

岩手県南部の大船渡周辺では、既に述べたように、南西風や西風で語の立項されていない地域が見られた。風向としてこれらに隣接する北西風では、主にナライの立項が認められる。

田野畑浜のカワシには「南風のあと、急に北西から吹き出す突風」とある。風向の変化を意味として語に取り込んだ表現であり、漁業従事者の風向認識において北海道道南地域でも認められた語である¹⁸⁾。

このほか、北風向の共通語形キタカゼに比べると、北東風と同様に共通語形ホクセー（ホクセイ）・ホクセーフー（ホクセイフウ）がほとんどないことも特徴である。

3.3 下北半島・岩手三陸沿岸地域における風名語彙の分布パターン

前項では、風向ごとに語の分布特徴を観察した。この結果、一定程度の語のまとまりが見えた例からは、いくつかの等語線を確認することができる。ここでは、語彙分布の形態に、ある程度特徴的なパターンが見られた例を取りあげて分類を試みた。パターンの観察には、本地域外に分布する語の連続性には適宜触れながらも、あくまで本稿で対象とした下北・岩手三陸地域内に限定して行う。この結果から以下の9種の型を示す。

(a) 下北半島北部型

図2の北風に見えるタマカゼは、下北半島北部にまとまって分布しており、半島北部東通村付近に等語線を認めることができる。半島南部から岩手には分布が見られない型である。同様の分布形態は、図3の北東風におけるアイノカゼ類が半島北部に集中し、陸奥湾沿いには見られない分布特徴に近い。ただし、アイノカゼ類では岩手側に1地点の事例がある。タマカゼおよびアイノカゼ類は、『事典』では津軽半島や秋田以南の日本海側、北海道道南等にも分布が認められる語であり、本地域内では、その分布の一部として下北半島北部が切り取られた形である。

(b) 下北半島西部型

図6の南風に示したクダリやミナミクダリに該当するクダリ類は下北半島西部にまとまる。『事典』データでは、隣接する津軽半島や北海道等にも分布し、その一部が下北半島にかかっている形である。また、図8の西風ではカミカゼの分布形態がこの型にやや近い。このうちの1地点は岩手側に飛び火的に分布するが、下北半島西部に一定のまとまりがあることがわかる。

(c) 下北半島広域型

図9の北西風に見られるタマカゼやニシタマカゼ等のタマカゼ類は、前述の(a)および(b)よ

りも広く下北半島に分布が及んでおり、南の等語線は八戸付近になる。(a) および (b) とあわせ、分布の境界が三八地方に存在する事例が一定程度あることが明らかになった。また、図4の東風に見られるヤマセ類では、久慈市長内町に1例が分布する以外は、下北半島での分布の一体性が確認できる。

(d) 下北半島・三陸北部型

下北半島より等語線がさらに南下した形を見せるのが図7の南西風にあるヒカタ類で、岩手県の久慈市長内町が南限である。長内は本項データに基づけば、北部から分布が連続する語形の等語線が通るケースがいくつか見られることになる。

(e) 下北半島北部・三陸圏型

図5の南東風ヤマセ類は、前項で確認したように青森側では下北半島の津軽海峡沿いに分布し、半島南部のミナミヤマセを挟むように岩手側にも散在する分布形態である。秋田や津軽半島、北海道にも分布するミナミヤマセは、下北半島南部で周辺部のヤマセに入り込む分布形態である。

(f) 岩手三陸南部型

図2の北風に見られるコチ類、図5の南東風にあるイナサ、図9の北西風でのマカタ類は、岩手三陸の宮古周辺以南にまとまりのある分布領域を持つ。

(g) 岩手三陸南端型

図3の北東風に見えるシカマ、図8の西風にあるナライ類はその分布が岩手三陸地域の南端にまとまっている。シカマの『事典』での用例では、茨城県の1地点を除くと隣接する宮城県への分布の連続はないが、ナライは宮城県を含んで広く関東以西まで分布が連なる。なお、前項でも述べたように、図3の北東風等において、岩手三陸南端での語の未収録地点が目立っており、分布型の例として分類しておく。

(h) 岩手三陸広域型

図3の北東風におけるキタオキ類、図4の東風にあるオキカゼ類は、ともにオキカゼの変異としてまとめられる。双方は青森と岩手の県境より南に広く分布し、青森側には侵入していない型である。

(i) 下北半島・岩手三陸広域型

共通語形はこの型での分布が多い。図6の南風に見えるミナミカゼ類および図8の西風にあるニシカゼ類などが典型例である。

3.4 指示風向から見る風名語彙体系

既に図1を用いて確認したように、『事典』収録語彙には、各地域で現実に使われた風名語彙の語彙量の全てが反映されたものではないと考えられ、風向数が極端に少ない地点も見受けられた。しかし、その中でも基本8方位の全てやそれ以上の方位数を語彙として持つ地点も収録されている。

本項では、前述した(a)から(i)の分布パターンをもとにして、ある程度地域ごとの分布のまとまりが得られた、下北半島北部、岩手県の三陸北部、三陸中部、三陸南部の4地域の中から風名

語彙の部分体系を取り出すことにする。そしてそこに何らかの特徴が見えるかどうかを考察する。

4 地域からの地点選択基準としては、示された語彙に方位の極端な偏りがなく、かつ豊富な語彙が報告されている地域とした。ただし、たとえば田老町の東風や南東風の例に見えるように、同一方位への併記語が多くかつ各語に付帯説明のない地点は、複数の被調査者の回答を総合した可能性が高いと判断して、できる限り選択しないようにした。もっとも、各地点での回答人数が不明であるため、多くの地点で複数の被調査者が関係した可能性がある。このほか、同様に併記例が多い久慈市長内町については、既に言及したように等語線上に位置する事例が多く、特に取り上げることにした。

以上の事由から、下北半島北部の風間浦村蛇浦、三陸北部の久慈市長内町、三陸中部の岩泉町小本、三陸南部の釜石市箱崎町を選択した。以下、地点ごとに、指示風向を意味項目とした風名語彙の部分体系の特徴を考察する。なお、風に関する気象データは、気象庁（2017）を利用した¹⁹。

(a) 風間浦村蛇浦町

図 10 に風名語彙と指示風向の関係を示した部分体系図を示した。蛇浦では 13 語の記載と 12 風向の弁別がある。語の風向は 2.2 で地図化した基本 8 方位のほかに、南南東と南南西および西北西が報告されている。北から東にかけての語は、複合語を含めて、アイタバカゼ・アイカゼ・アイシモカゼというアイノカゼ類が占める。一方、反対方向の南から西にかけては、ミナミクダリとシカタおよび双方の複合形クダリシカタが領域を作る。そして西はニシカゼとカミカゼで構成され、隣接する北西側ではタバカゼとその複合形ニシタバカゼが緊密な構造を作っている。このように、北西から時計回りに南東までのブロックは構造が簡素であるが、対する南西方面のブロックでは指示方位数が緊密になっている。当該地に隣接する大間での風のデータを見ると、平均風速は年間を通

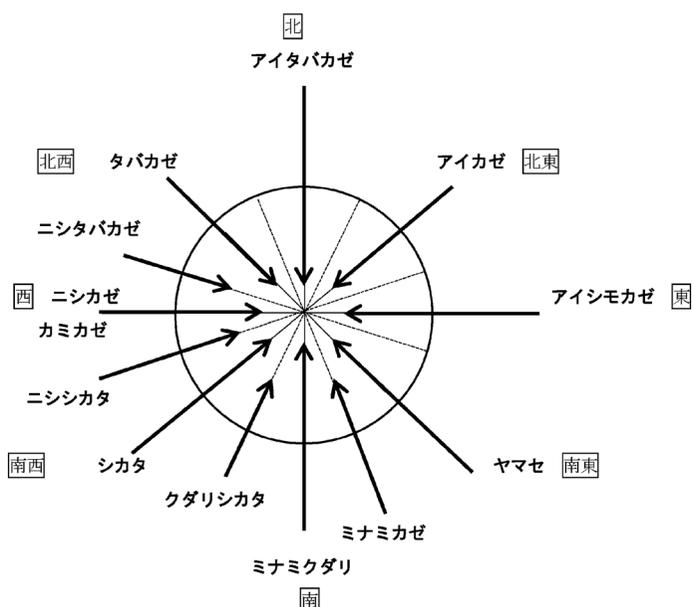


図 10. 風名語彙と指示風向（風間浦村蛇浦）

して常に毎秒2メートル以上であり、3メートル以上となるのは、11月から5月である。年間最多風向は西で、強風の多い10月から3月までの最多は西となっている。その他、4月に西南西、5月は南西、6月が東北東が多く、6月から9月には東となる。このように、冬季を中心に年間で西方面の風向が多く、同時に強風の発生も頻繁にあるという事象が、南西ブロックの語彙量と方位の弁別の多さに関係していることが考えられる。当地点のシカタには「道南海岸を直撃し荒れる風」との付帯説明もある。

南西方面に語彙が集中する同様の構造は、記載風向数の多い下北半島各地点でも見られ、大畑町・岩屋・むつ市大湊新町等でも確認できる。

(b) 久慈市長内町

図11のように、長内では、ヤマセとヒカタ類・マカタ類が重出する、異なり18語の記載で語の併記が多く、9風向の弁別がある。基本8方位のほかに報告された語の風向は南南西のみである。下北半島に見られるような南西方面に語彙量と指示方位が集中する形ほどではないが、「生暖かく気持ちの悪い熱風」との付帯説明がある南南西のナライが、語の意味となる指示方位の構造を特徴づけている。図1を見ると当該地点がある三陸北部では、9風向以上の地点はほとんどなく、やや南下した田老が9風向地点である。田老でも同様に南南西方位を持ち、ハマズイが使われる。久慈での気象データを見ると、平均風速が2メートル以上となるのは11月から5月で、年間最多は南西、10月から3月までの最多風向は12月から3月が西、4月に南西、5月から8月は東北東、9月から11月が南西となっている。南南西方位の語を特に持つ構造は、蛇浦同様に、当該地域での出現風向の多さと関係している可能性がある。

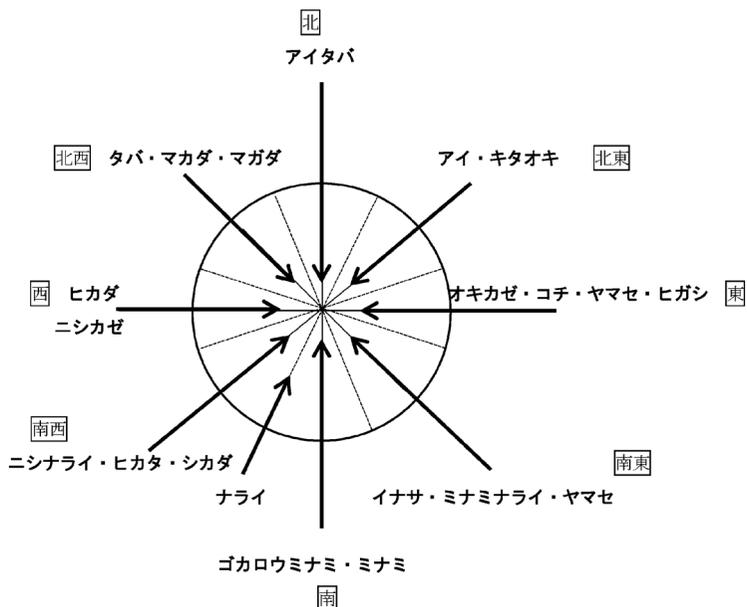


図11. 風名語彙と指示風向 (久慈市長内町)

(c) 岩泉町小本

図 12 に見えるように、11 語の記載で 8 風向の弁別が示されている。基本 8 方位以外に語がなく、かつ、その 8 方位全てに異なる語の収載があるという構造を持つ地点は、本地域 70 地点中で 11 地点であり、それほど多くはない。ただし、こうした風向数だけから見た構造には、2.2.1 で確認したように、地域的な偏りは特に見られないようである。

一方、語彙構造を見ると、東風向のオキカゼを中心に北東のキタオキおよび南東のミナミオキから構成される特徴が、三陸北部から中部に多い。そこに加わる形で南東のヒカタを併記の形で合わせ持つのは小本と隣接地点の田老、釜石浜町のみとなっている。これらの地域に見られるヒカタは、3.2.5 で述べたように、他の語との意味上の区別を備えて併用されたものと考えられる。また、小本周辺は、3.2.8 で触れた、弱風のアラシ類を西方位に持つ地点が多く、これもニシカゼ類との区別の結果と判断される。小本での気象データを見ると平均風速が 2 メートル以上となる月はなく、1.8 メートル以上となるのは 12 月から 4 月である。年間最多は西方位で、最多風向は 11 月から 4 月までは西、5 月から 8 月が東北東、9 月・10 月で西北西となっている。これらの風の事象と基本 8 方位全てに対応した語彙の弁別構造との関連は本地点では見えにくく、語彙自体の特徴を示すにとどまる。

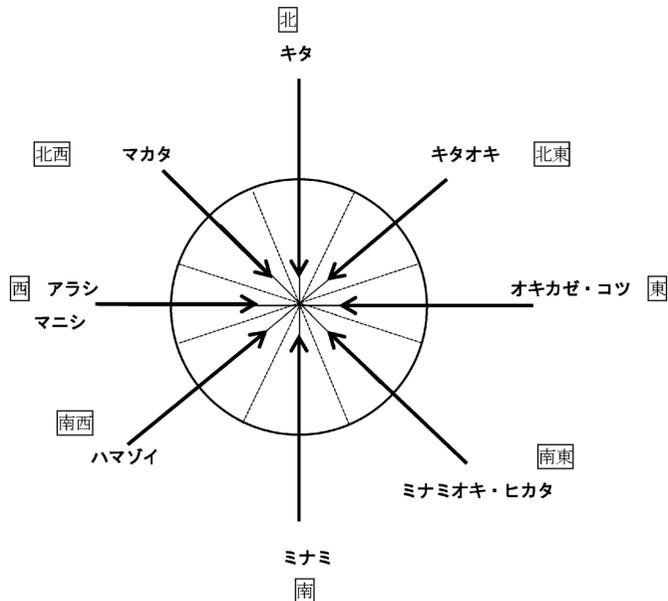


図 12. 風名語彙と指示風向 (岩泉町小本)

(d) 釜石市箱崎町

図 13 を見ると、10 語の使用で 8 風向の弁別が示されている。風向に対応している語彙は基本 8 方位ではなく、オキモノが東から南東、イナサは南東から南であり、それぞれ東南東、南南東の記載ではない。図 4 などを見たように、オキカゼ類のうち、オキカゼやオキモンは東風向が代表的で、特に三陸地域に広く分布していた。このうちのオキモンとモウキは、隣接地点の釜石市浜町で

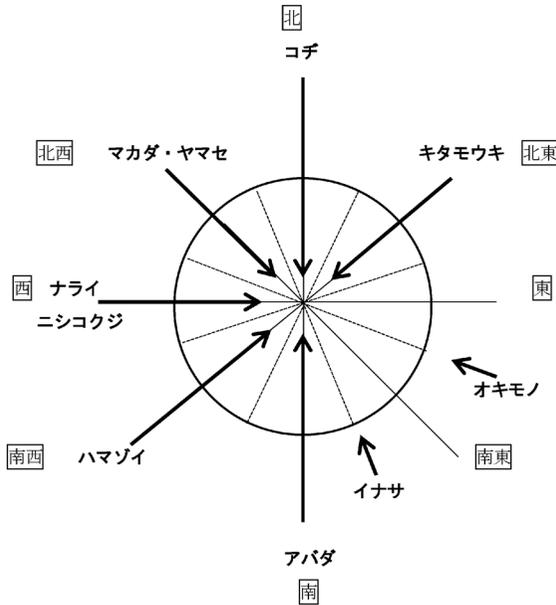


図 13. 風名語彙と指示風向（釜石市箱崎町）

は北東から東の記載であり、箱崎と同様に微細な方位を意味として示す語が語彙構造の中に入り込んでいる。また、近隣の大槌町安渡ではイナサが南から南南西方位の記載であった。釜石での風の事象を見ると、平均風速が2メートル以上となる月はなく、1.8メートル以上になるのは、12月と1月、3月と4月である。年間最多風向は西で、12月から4月までが西、5月から8月は東、9月から11月で西北西が多い。箱崎でのイナサは、「台風通過後に強く吹く風で危険」とあり、また、オキモノに付帯説明はない。本地点箱崎のような、東ブロックに入るオキカゼ類、南東方面のイナサ、南西のハマゾイ類、北西のマカダ類を備えた構造は、三陸中部から南部に多い語彙体系の特徴となっている。

おわりに

『風の事典』の「第二部」の収載語を資料として、青森県下北半島から岩手県三陸地方の風名語彙の分布特徴を考察した。この結果、主として以下のことを明らかにした。

- (1) 『事典』の調査地点ごとに得られる回答の情報量には差があり、風名語彙が示す方位の弁別数には地域差を見出しにくい。
- (2) 語彙分布の形態には、おおむね9種のパターンが観察される。
- (3) 地域の出現風向の多少と、方位を意味とする風名語彙の構造との間に関連性がうかがえる。

今後は、各地点の語彙体系の特徴や付帯説明等から現れる、漁業語彙としての位相性も考察の視点に含めながら、さらに広域での語彙分布の特徴を明らかにし、語の伝播の歴史にも触れていく必要がある。漁業語彙としての性格から、伝播の考察には海上ルートを視野に入れなければならない

が、『日本言語地図』等から得られる当該地域の分布特徴との比較もある程度参考になるかもしれない。また、沿岸部での臨地調査を継続しながら語彙体系を提示し、両者の結果を比較して考察を進めたい。

注

- 1) 北海道道南地方および沖縄県伊良部島等で臨地調査を試みているほか（志村 2008a、2008b 等）、青森県（加藤ほか 1988）での調査の結果がある。また、岩手県釜石市でも調査を継続している。
- 2) 同書 145 ページ。
- 3) 同書 5 ページ。
- 4) 同書 145 ページ。
- 5) 結果的に、この語項目の採用方針は筆者のこれまでの方法（志村 2014a、2014b）と同様となる。
- 6) 語の使用地点名については、いくつかの処理を行った（括弧内の数字は該当箇所のページを示す）。「青森県六ヶ所村平沼」と「平沼道下」は、平沼 1 地点として処理した。「田野畑村浜」は、田野畑村机浜の地点として処理した。「田老町田老」は、田老町地点に組み入れて処理した。岩手県内の「船越」、「船越湾」、「船越湾漁協」の表記部分については、3 例合わせて船越 1 地点として処理した。「岩手県気仙沼市長磯松原」（529）は宮城県気仙沼市として対象地点から外した。また、以下の括弧内に示す誤植あるいは表記の慣例、古表記と見られる部分を修正して処理した。東通村小田野沢（「小田野浜」、157、851）、久慈市長内町（「長門町」・759）、種市町陸中八木（「久慈市陸中八木」・550）、宮古市鉾崎（「袖ヶ崎」・330、「鉾ヶ崎」・192）、陸前高田市気仙町湊（「気仙沼町湊」・237、627、797、852）。
- 7) 地域の風名語彙に現れる風向数には、当該漁業社会における漁業規模等との相関性が存在することが、久木田（1986）、室山（1998）等で指摘されている。
- 8) 同書 4 ページ。
- 9) 同書 56 ページ。
- 10) 同書 23 ページ～27 ページ。
- 11) 同書 899 ページ。
- 12) 同書 28 ページ。
- 13) 『事典』「第一部」のイナサの解説中に「この言葉が知られているのは、北限は岩手の久慈で」との記述があり、この長内町地点を指したものとみられる（85 ページ）。
- 14) 同書 757 ページ。
- 15) 同書 46 ページ。
- 16) アラシおよびマアラシには「方向によらない風」「陸風」としての立項がある。アラシには、本地域内で、田野畑村浜、田老町、大船渡市大船渡町が載る。マアラシでは「陸風」として大船渡町が示されている。全てにおいて強風の記述はない。本項では、『事典』に記載されたそれぞれの風向ごとに言語地図化を行ったため、「方向によらない風」はデータに入れていない。また「陸風」については、該当した大船渡町で西風などの可能性も考えられるが、方位が示されていない以上、地図項目からは外した。
- 17) 『事典』には北西風として釜石市浜町の用例でツカマがある（588 ページ）。一つ仮名の発音による記載結果によるものか、あるいはアンケート転記時に「シカマ」を読み誤った可能性等も考えられるが、同地点にはシカ

マの立項があり、地図凡例にはシカマの同類として併記した。

- 18) 志村 (2008b) 8 ページ。
- 19) 気象庁ホームページ (2017) 「各種データ・資料」における「過去の地域平均気象データ検索」のデータによる。

参考文献

- 加藤正信・三井はるみ・大西拓一郎・志村文隆 (1988) 「青森県津軽地方の方言調査報告」『日本文化研究所研究報告 別巻』25、東北大学日本文化研究所、43-55
- 気象庁ホームページ (2017) 「過去の地域平均気象データ検索」
<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/cgi-bin/view/index.php> (2017年10月19日取得)
- 久木田恵 (1985) 「漁業社会における風の語彙体系の記述と比較の方法」『方言研究年報』29、和泉書院、91-109
- 国立国語研究所 (1966～74) 『日本語地図』1～6、大蔵省印刷局
- 柴田 武 (1988) 『語彙論の方法』三省堂
- 志村文隆 (2008a) 「沖縄県伊良部島方言の風位語彙－生業との関係を中心に－」『国語学研究』47、1-12
- 志村文隆 (2008b) 「北海道函館市東部地区方言における風位語彙体系の生業差」『北海道方言研究会会報』85、1-14
- 志村文隆 (2014a) 「沖縄県における風位語彙の分布－『風の事典』を資料として－」『人文社会科学論叢』23、47-66
- 志村文隆 (2014b) 「津軽海峡沿岸地域における風位語彙の分布－『風の事典』を資料として－」小野米一・菅泰雄・佐々木冠編『北海道方言研究会40周年記念論文集 生活語の世界』北海道方言研究会、92-99
- 尚学図書編 (1989) 『日本方言大辞典』小学館
- 関口 武 (1985) 『風の事典』原書房
- 津軽海峡海難防止研究会編 (1989) 『津軽海峡の天気とことわざ』北海道新聞社
- 中山正典 (2009) 『風と環境の民俗』吉川弘文館
- 日本国語大辞典第二版編集委員会ほか編 (2000～2003) 『日本国語大辞典 (第二版)』1～13、小学館
- 室山敏昭 (1987) 『生活語彙の基礎的研究』和泉書院
- 室山敏昭 (1998) 『生活語彙の構造と地域文化－文化言語学序説－』和泉書院
- 柳田国男編 (1942) 『増補風位考資料』明世堂書店

The Dialect Distribution of *Fūmei-go** (Wind Terms) in Shimokita Peninsula and Iwate Sanriku Coast Area

— Based on *Kaze-no-Jiten* (the Encyclopedia of Wind) —

SHIMURA Fumitaka

This paper reveals the dialect distribution and the property of *Fūmei-go* (wind terms), which describes types of wind, used in Shimokita Peninsula and Iwate Sanriku area, based on the words that are listed in Part II in *Kaze-no-Jiten* (the Encyclopedia of Wind) written by Sekiguchi Takeshi.

In this encyclopedia, 2036 Japanese words, collected through a questionnaire carried out throughout all of Japan describe types of wind.

This paper proposes a distribution map of *Fūmei-go* and the characteristics of the wind terms were examined by using information which this encyclopedia provides; the meaning of the wind terms and the places in Shimokita Peninsula and Iwate Sanriku coastal area where the terms were used.

The findings in this analysis are as follows:

There is much difference in the information volume of the response results depending on researched places. Therefore, it is difficult to confirm distinctive difference in wind direction among the given wind terms.

Roughly 9 types of patterns are observed in the wind term distribution.

Correlation can be observed between the amount of words that represent wind direction and the semantic structure of the wind terms that imply wind direction.

* *Fūmei-go* (風名語 : wind terms) types of wind representing direction, power, season etc., and are termed as such in my discussion.